(4)安土・桃山時代

農産物流通の場として、小荒井と小田付で定期市が開かれる

町割りと定期市のはじまり

永禄7年(1564)には芦名盛氏が小荒井の町割りを行い、天正10年(1582)には家臣佐瀬大和(させやまと)が小田付の町割りを行った。

芦名氏の時代に山の民と農村の民が物資交換をするため、中田付村で十二斎の市が開かれ、その後、小荒井・小田付に移された。小荒井村では、永禄7年(1564)毎月2と7の日を市日と定め、六斎市が開かれ、天正10年(1582)この六斎の市日を小荒井村と小田付村で二分し、三斎市となった。時を経て、この定期市が商店となり、まちが形成されていく。

小荒井と小田付の市場は、阿賀川舟運と越後裏街道を通じて、越後ともつながっており、喜多方からは米が、越後からは塩・海産物などが運ばれた。

天正17年(1589)、伊達政宗は芦名義広を破り会津を手中に収めたが、天正18年(1590)豊臣秀吉による奥州仕置で没収された。その結果、秀吉の腹心である蒲生氏郷(がもううじさと)が会津を支配することとなった。

小荒井村初市俵引きの図
(高橋金年画 市内寺町 佐藤弥右衛門 蔵)

蒲生氏郷が領内を把握するために作成した
「蒲生領高目録」に記載されている村

(資料:図説喜多方の歴史)